長谷川先生との思い出

文学部教育学科　井上直子

長谷川先生との出会いは私が青山学院大学に就職する３年ほど前になる。当時長谷川先生はフリースタイルスキー全日本チームの監督をしていた。私の所属する研究室に日本代表選手の体力測定を依頼してきたのだ。フリースタイルスキーは出来て間もない新しい種目で、モーグル、エアリアル、そしてバレエという種目から構成されていた。しかし、名前を聞いただけではどのようなスポーツなのか皆目検討がつかない。スポーツシーンが想像できなければ、何を測定すればよいのかわからない。測定の打ち合わせでそんな話になったところ、長谷川先生は「じゃあ見に来れば？」と、猪苗代で開催される世界選手権に招待してくれたのだ。拍子抜けするほど簡単に事が決まり「気前の良い、フレンドリーな先生」という印象がしっかりと刻み込まれた。その後、私が助手をしていた大学でも長谷川先生は非常勤講師をしていた。ここでは学生時代からの知り合いということで、ずいぶんと声をかけてもらった。そしてご縁があって、長谷川先生と同じ大学に勤務することになったのである。

長谷川先生にとってここ８年ばかりは大変だったに違いない。本来ならば少しゆっくり出来る年頃なのだろうけれども、ちょうど厚木キャンパスから相模原キャンパスへの移転が決まり、学内が忙しくなり始めた頃である。カリキュラムの見直し、キャンパス移転準備、引越し、キャンパスの立ち上げ等が次から次へと怒濤のようにおしよせてきていた。特に相模原キャンパスの１年目は、事務も混乱を極めていたし、予期せぬ出来事の連続で、毎日のように問題が噴出した。身体の技能分野のコンビーナーとして、先生は先頭に立って問題解決をしてくれた。長谷川先生はフットワークが軽い。「よし、じゃ直ぐに行って話してくる。○○さんのところだよな？井上さん一緒に行こう」とＢ棟に出向いて、強引にも思えるようなやりとりをしつつ、最後には相手に「わかりました」と言わせ、丸くおさめてみせた。「最近どう？」とウオーミングアップのようにひとしきり世間話をした後、絶妙なタイミングで「ところでさぁ」と切り出す。世間話で長谷川先生に心を許してしまった相手は「嫌」とは言えない雰囲気にのまれてしまう。さらにだめ押しするように、ニコニコしながら「悪いねっ」「今度飲みにいこうよ」とか「ゴルフ一緒に行こうよ」と言ってまた話題を変える。決して深追いはしない。そうかとおもうと、時には真っ向勝負にでて「それはおかしいじゃない？」と、逃げそうな相手をしっかりと捕まえたりもする。緩急が上手い。

あの時期、長谷川先生が頑張って動いてくれたからこそ、身体の技能領域は皆で協力してなんとか乗り切ることが出来たのだと思う。

長谷川先生は「何となく」近くにいて、困ったときには「何となく」助けてくれた。相手が必要な分だけの手を貸すというのは難しい。ついつい、手を出しすぎたり足りなかったりするものだ。しかし先生はバランス感覚が優れているらしく、「いいかんじ」のところで手を貸してくれていたような気がする。

長谷川先生、23年間本当にお世話になりました。ありがとうございました。そして、これからもどうぞ宜しくお願いいたします。